



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	演劇部活動と卒業生の進路：「進路指導論II」の特別講義
Author(s)	加藤, 裕明
Citation	北海道大学教職課程年報, 3, 31-42
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52589
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12514871_3_4.pdf



演劇部活動と卒業生の進路

—「進路指導論Ⅱ」の特別講義—

加藤 裕明

はじめに

本稿の目的は、2012年12月20日、『進路指導論Ⅱ』において筆者が担当した特別講義の概要を報告することである。講義の中で検討の素材としたものは、筆者が勤める札幌清田高等学校における演劇教育実践と演劇部卒業生に対するアンケート結果である。それらを資料として検討したのち、受講生との質疑・応答を行った。そして講義後に受講生にアンケートを記してもらい、高校生の演劇部活動とその後の進路（人生）について考えるところを自分の経験をもふまえて記してもらった。それらの北大生の感想や考察と、清田高校生の学びとを照らし合わせ、演劇部活動に対する反省的な検討を試みたい。

1 部活動と、その教育課程上の位置づけ

学校における部活動は、課外活動として長く教育課程外に置かれてきた。だが2013（平成25）年度から実施される『高等学校学習指導要領』（「新学習指導要領」）「総則」では、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化および科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」¹と記され、「教育課程との関連が図られるよう留意」することが示された。

これまでの指導要領では、生徒の自主性や自発性を伸ばし、「学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養」を担う教育活動は、主として、「生徒会活動」や「ホームルーム活動」あるいは「総合的な学習の時間」が担うべきものとされてきた。事実、「生徒会活動」や「ホームルーム活動」は新教育課程においても、「生徒の自発的、自治的な活動が効果的に展開されるよう」、また「よりよい生活を築くために集団としての意見をまとめるなどの話し合い活動や自分たちでできまりを形成する力を養う活動などを充実するよう」指導することが求められている。また、「総合的な学習の時間」に関しては「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成」し、「問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て」るよう指導することとされている。しかし、生徒の自発性は、自己の興味の向かう対象に発揮されるものであり、同じ目的をも

¹ 文部科学省編『高等学校学習指導要領』（2009年）、8頁。なお、高校に先立って実施された『中学校学習指導要領』にも同じ文章が記されている。

った仲間と刺激しあい伸長するものであることを考えれば、生徒会活動やホームルーム活動、総合学習と同様、部活動もまた、それらの教育目標を達成する活動と位置付け、指導要領の中に記されたことはいわば当然とも言える²。

また、「新学習指導要領」において新たに示された「生きる力」とは、文科省によれば「確かな学力」、「豊かな人間性」そして「健康・体力」という三者のバランスのとれた力であるとする³。言い換えれば、「生きる力」を強調するのは、現在の学校教育が「バランス」を欠いた状態であると、文科省自身が認めていることの証左にほかならない。とりわけ大学進学を希望⁴する生徒のいる全日制普通科高校では、各教科の授業において、程度の差はあれ大学受験を想定した授業を行わざるを得ない。筆者の勤務する高校もそのひとつである。学校全体の教育活動をみると、三者のバランスは確かに欠いているといわざるを得ない。特に「豊かな人間性」すなわち「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」を伸ばすための教育活動は、教科教育というまでもなく、ホームルームや総合学習では展開することはなかなか難しい。それらが、小論文学習や進路学習という名の受験指導、受験システムについての教師による解説などの座学や各種の講演会⁵で占められているからである。学校祭の一時期を除いては、生徒同士が主体的に活動を行い「他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」を自ら育むような時間にはなっていないのが高校の実態である⁶。

² 新学習指導要領の中に部活動が掲載された理由について、第 171 回通常国会の参議院文教科学委員会で、文科省の山中スポーツ・青少年局長は、「特に中学校、高等学校、部に加入している生徒にとりましては、学校生活の中で授業とともに非常に大きな場面、役割を占めている」とし、「平成 20 年 1 月の中教審答申の中でも、部活動、これが中学校、高等学校の教育の中で非常に大きな役割を果たしてきているということで、教育課程に関連する事項として学習指導要領の中で記述する必要があるのではないかという指摘がございまして、これを受けまして、今回の学習指導要領改訂では、部活動について、学校教育の一環として教育課程との関連、これを図ること」を記述したと答弁している（第 171 回国会参議院文教科学委員会会議録第 2 号、2009 年 3 月 17 日、12 頁）。

³ 「新学習指導要領の基本的な考え方」（文部科学省、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm）

⁴ 文部科学省が公表した学校基本調査速報によれば、2012 年度の大学進学率は新規高卒者、浪人生合わせ 50.8 パーセントで 2011 年よりも 0.2 ポイント減である（2012 年 8 月 27 日付「日本経済新聞」）。

⁵ 筆者の勤務校では、「総合的な学習の時間」に、例えば全校で、医師の桑山紀彦氏の講演会「地球のステージ」の鑑賞を 7 年にわたり継続している。桑山氏は世界の紛争地帯への医療支援、人道支援に長く携わってきた。現在、東日本大震災の罹災者の医療ケアに携わっており、昨 2012 年は、全校生徒が震災の復興とその支援をメインとした講演を視聴した。また、学年ごとの「ホームルーム」では、受験産業や予備校の社員による進学説明会を複数回開催している。

⁶ このような実態は、もちろん筆者の高校だけではない。例えば昨年まで『進路指導論Ⅱ』を担当された高校教諭の馬場雅史氏は「今日、高等学校における進路指導は、端的にいうと職業斡旋と受験指導に焦点化されている。」と述べている。（「高等学校での『自立塾』の実践—『進路指導論Ⅱ』の特別講義—」『北海道大学教職課程年報』第 2 号、2012 年、23 頁）。馬場氏の「自立塾」の実践も、既存の教科教育、HR、総合学習には収まらない課外における教師の善意による活動である。

では「豊かな人間性」を、座学や受動的にではなく、生徒が主体的に学びとる可能性がある教育活動とは何か。少なくとも現段階では、私は部活動において他にない考える。平日の放課後2時間と限っても、カリキュラムで言えば週10単位の計算になる。部活自体がただでさえ多忙な教師の仕事をさらに多忙化させていることは言うまでもない。が、にもかかわらず、今なお部活動は学校外に流れ出ることなく学校内に留まり続けている。高校間あるいは運動系、文化系その他の間で差はあるものの、多くの生徒が所属している。教師の間でもその教育的意義が認識されている⁷からこそ部活はこれまで学校にその役割を担わされてきたともいえる。しかし、後に受講生の経験にもとづく感想にもあるように、単に部活動の時間と場所だけが高校生に保証されていればよいわけではもちろんない。部によっては生徒同士の話し合いも十分なされず、思考力や協調性といった教育目標につながらない場合もあるからである。あくまでその活動内容を、教育課程と関係づけ、その後の進路（生き方）との関係性を検討できる対象であることが重要であろう。

そこで次に、筆者自身が担当する高校演劇部を事例とし、演劇部活動とその後の進路（人生）との関係について検討を加えてみたい。

2 清田高校演劇部の活動の概要

清田高校演劇部では、平日は基本的に毎日⁸活動する。月・水・金曜日（6時間授業。2012年度）の放課後は午後3時30分から同5時30分までの約2時間、火・木曜日（7時間授業）の放課後は午後4時30分から同6時までの約1時間半を活動にあてる。土曜日は、公演の約1カ月前から、日曜日は2週間前から活動日とする。休日の活動時間は稽古の進捗状況にもよるが、ほぼ午後1時から3時半まで、公演直前のリハーサルの日などは、土日は午前10時から午後4時まで活動する。

公演は4月の新入生歓迎公演、7月の学校祭公演、10月の高等学校文化連盟の石狩支部大会公演の年3回（全道大会に進んだ場合は4回）である。これに加え2012年には2月に一般市民向けの自主公演を行った⁹。

運動系、文化系問わず大半が3年生の夏前で引退となるのに対し、清田高校演劇部の場合は、3年生秋10月（2012年度は全道大会に進出したため11月末）まで活動を続けるのが基本である。ここまで長く団体で活動する部活動は演劇部のみである。

⁷ 部活動の教育的意義に関する全国調査と現場教師の認識については、中学校を対象としたものであるが、『VIEW 2 1 中学版 2008年春号』（Bnesse 教育開発センター、2008年）が参考になる。

⁸ ただし、年4回ある定期考査の1週間前から考査終了までの約10日間は、大会前を除き部活動は禁止である。

⁹ 活動内容と、教師の支援の詳細については、拙稿「演劇教育における教師の支援—札幌K高校『K版 ロミオとジュリエット』上演を事例として—」（北海道教育学会編『教育学の研究と実践』第8号、2013年3月）を参照されたい。

部員数は2012年11月現在、男子2名（1年2年各1名）、女子17名（1年7名、2年4名、3年6名）の計19名である。

3 演劇部卒業生の振り返り

（1）アンケートの概要

「進路指導論Ⅱ」の担当者である上原慎一氏から、演劇部活動とその後の進路について話すよう依頼を受けた後、筆者は演劇部卒業生に対するアンケートを実施した。次頁に示す様式のアンケートを作成し、時間も限られていたため、基本的には電子メールによって配布・回収を行った。配布数41名中締め切りまでの有効回答数は9であった。「進路指導論Ⅱ」の中では、特に質問(7)「清田高校での演劇活動の経験をふりかえるとき、それはあなたの中で、どのような意味をもっていますか。進路選択、就職等にどのような影響を与えていますか。」に対する回答内容をそのまま印刷し、資料として提示し議論の材料とした。

本稿では、その中から同期の声が複数存在する、19歳、20歳、26歳、27歳（2012年現在）のOB、OGの文章を取り上げる。そして、彼ら彼女らが、卒業後にその経験を振り返ったときに、演劇部活動の中で、いかなる学びを経験したと考えているか、教育課程に位置づけられる学習目標と関連づけて分析し、部活動の意義について考察を加えたい。

（2）アンケートの回答からうかがわれる卒業生の進路と学び

①表現する力

Aさんは27歳の女性である。高校卒業後札幌市内4年制私大（社会福祉学部）に入学した。リベラルシアターという劇団に1年間ほど所属したが、大学では合気道サークルに所属し新入生への出し物として劇の脚本・演出などを担当した。卒業後、民間会社に就職し、建築・土木などの仕事用品専門店で販売職を3年間経験した。3年目には主任として店舗運営補佐を兼任。その後本社へ移動し、人事部で新卒採用を半年間担当した。

高校演劇部の経験によって、自分の意見を活発に言えるようになった、という卒業生は多い。Aさんもそのひとりである。彼女は、「一番役立ったと思うのは、表現力の向上です。」と答えている。そして、

大学の授業においても、就職活動・仕事においてもプレゼンテーションをする機会では本当に役立ちました。声を大きく出す、聞いている人を意識する、話し方に抑揚をつけるなど、基礎的な力が備わっていれば、プレゼンに説得力が増します。私はこの能力を買われ、会社で新卒採用担当を任せられ、就活イベントや大学内で自社の会社説明を多くこなしました。

アンケート趣旨 (抄)

清田高校演劇部卒業生のみなさんへ。お元気ですか。

さて私、加藤は、清田高校演劇部の活動はとても意義ある活動と考えており、他校の顧問の先生や、大学の先生方とも交流し、互いに学び研究しあい、研究会で発表しあっています。以前、北海道大学教育学部の上原先生からお電話をいただき、大学の授業(「進路指導論」)の中で1コマ受け持っていただけないか、というお話がありました。北大生に、高校の演劇活動がその後の進路(人生)にどんな影響を与えているか、という中身で話をしてもらえればという依頼でした。部活動とその後の進路(人生)を考える追跡調査は私も大変意義あることと考え、私に出来る範囲であれば引き受けさせてもらうことにしました。北大での講義は12月20日(木)です。そこで清田高校演劇部を卒業した皆さんに、その後の進路や生活に、高校演劇での活動がどんなふうに生きているかについてお伺いしたいと思った次第です。なお、アンケート結果を授業や研究会等で使わせていただくときは「A君」「Bさん」のように仮名を用います。なお、返信はできるだけEメールで以下のパソコンアドレス送っていただければ幸いです。ぜひご協力よろしくお願いします!

- 質問** (1) あなたの名前 ()
- (2) あなたが卒業した年 卒業担任の先生 平成()年()先生
- (3) 演劇部で上演した大会での演目(覚えている範囲で結構です) ()
- (4) 演劇部で上演した校内公演での演目(覚えている範囲で結構です) ()
- (5) 進路 例)「〇〇大学」、「〇〇専門学校」等
- すでに就職した方は、例)「〇〇大学から〇〇会社へ就職、現在〇〇の仕事についている。」
- といった形で、現在までの進学、就職について記してください。()
- (6) 大学や就職先等での演劇経験
- 例)「〇〇大学」の演劇研究会で活動。ボランティアで演劇の手伝いをした等少しでも関わりのあることは何でも記してください。()
- (7) 清田高校での演劇活動の経験をふりかえるとき、それはあなたの中で、どのような意味をもっていますか。進路選択、就職等にどのような影響を与えていますか。(例、高校での演劇経験を通じて、当時はわからなかったけど、人間や社会について今はこんなことがわかった、進路選択や就職についてこんな風に考えるようになった…等々なんでも自由に記してください。書ききれない場合ははみ出しても結構です。

2012年12月8日締め切り

と続けている。彼女は、大学時代にも1年間ではあるが劇団で活動したり、合気道サークルにも入って活動しており元来活動的な人物であるとも言える。だが、特に高校時代に関しては以下のようにも述べている。

演劇部は他の部活と違い個人技を磨くことがほぼ意味がない。主役も裏方も1人1人が芝居を創るピースであり、全員が芝居全体の向上を考える。自分の演技プランが正しいとは限らない。演出、顧問、他の部員、観客など様々な人の意見を聞いて素直に受け入れること、自我を通さないことが芝居を良くする近道になる。このような演劇から学べる考え方に、社会人になってから助けられたように思います。

Aさんの中では、高校時代の演劇部での活動経験によって、他者とともに協調しながら自分を表現する経験が、社会人になっても生かされるものとして認識されている。

②思考する力

Bさんは、20歳の男性。札幌市内4年制（表現芸術科）私大に在学中である。札幌市内の劇団で役者、演出、スタッフを担当している。大学も演劇公演が可能なホールのある大学を選択し、そこで今も演劇を学んでいる。アルバイトをした民間運輸会社から、大学卒業後正規に就職することを薦められている。彼は「清田高校で演劇について深く考える機会を与えてもらった」ことで、

人間がいかにもものを考えずに生活しているか、そしてそれを許す社会を作ったかが演劇経験を通してわかった。

と記した。演劇は、人間と人間との関係、そして人間と社会との関係を考え、描く芸術である。例えば、Bが出演した高橋揆一郎原作『観音力疾走』や、ウィリアム・サローヤン原作『わが心、高原に』という作品は、貧しいながら社会の片隅で必死に生きる小さな人間、そして社会との関係を描いたものであった。また、彼が3年の時には高文連の大会に、家族をテーマにした作品を自分（生徒）たちで創作することにもチャレンジしている。演劇を自分で創るという経験もふまえた上で、上記の言葉が語られているとみていいだろう。

③主体的に活動する力

また、Cさん（19歳女性）は東京の4年制私大に在学中である。現在も大学の演劇サークルに所属している。彼女は、

すべて演劇からとは言いきれませんが、自分から何か(演劇に関係ないことでも)に勇気を出して挑戦するという力は、かなり演劇に取り組む中で得られたものだと思います。

世界観やモノのみかたもかなり変わったというか、影響を受けました。

と語っている。「すべて演劇からとはいいきれませんが」という慎重な留保付きだが、その口調からは、高校時代の経験が、現在も彼女に影響を与えていることが読み取れる。

またCさんと同期のDさん（札幌市内4年制大学在学中）は、当時演劇部部長をつとめていた。彼女は、

演劇部に入ったことで、何に対しても向上心が強くなった気がする。高校のときは、正直台本選びや台本構成で意見を言うことは少なく、もっと自分の意見を言えばよかったと思っているが、今では、例えばアカペラサークルでは、もっとサークルを良くしようといろいろな案が出てくる。

と記している。彼女はたまに高校に来て、部活の後輩にも声をかける面倒見のよいOGである。その際、筆者や後輩との対話において彼女は、サークル活動を活発に行い、1年生ながら自ら集団の軸になるよう活動しているという。

二人の振り返りの記述によれば、自ら発言したり、物事に主体的に取り組んだりする姿勢は、高校時代の経験から得られたものであると読み取ることができる。

④連帯する力

ただし、卒業生たちは、演劇部での経験を、すべて肯定的に受け止めているわけではない。Eさん（26歳女性）は、札幌市内4年制私大（国文学）卒業後、スーパーでアルバイト中である。高校卒業後、演劇経験は特にならない。彼女は、

役の心情を考えて皆で意見を言っていると、自分では考えつかないようなことができて、カルチャーショックだったけど参考になった。だが、同時に知らないことだらけの自分を思い知った。」と記し、「私にとって一番の影響は、卒業しても当時の部員たちとの繋がりがること。会えば昔に戻れるし、皆の近況を聞くのも楽しい。

と演劇部の仲間との話し合いから、自分とは異なるものの考え方に触発された経験とともに、仲間との繋がりの大切さをひとつの財産として記している。が、一方で、「それは諸刃の剣だったかもしれない。」という冷静な観察も忘れない。

高校在学中言われたことだが、演劇部だけで固まらないように。確かにそうだ。浅くても広く人とつきあっておけばよかったと思ってる。人付き合いが少ないと間合いとかがわからなくなってしまう、人との関わりが怖くなってしまう。相手に対して無関心になったことで、もっと知ることが出来たかもしれないことに出逢えなかったのは

後悔している。

と記し、演劇部の仲間うちだけの人間関係に「固ま」ってしまったことを反省している。この点について、当日の受講者から感想が提出された。すなわち演劇によってコミュニケーション力が高まるというが、それは、演劇部の中だけで通じることなのではないか、というものである。演劇部に限らず、すべての部活動について言えることだが、自分の属する部活の中の「繋がり」だけで満足することのないような活動を日常から意識して行う必要があるだろう。2008 年から高校生に対してだけではなく、一般市民に向けた地域の公共ホールを使った公演活動¹⁰をはじめたのは、筆者のなかにもそのような反省的思考があったからにはほかならない。

だが、一方でEさんと同期のFさん（大学卒業後、大学の図書館職員として働く）は、当時を振り返り次のように記している。

演劇活動そのものが、進路や就職に影響を与えたかどうかはわかりません（自覚していなかったと言えいいのでしょうか）。ただ、ひとつ確かに言えることは、演劇部を通して出会った人たちや経験が、自分にとってかけがえのない大切なものだということです。中学校での人間関係は、決していいものばかりではありませんでした。友だちや仲間というものが信じられなかったのも事実です。だから高校では、新しい出会いを求めて部活動をやってみようと思いました。そうして出会った演劇部の仲間たちは、それまでの上辺だけの付き合いではなく、本音でぶつかり合うことができる人たちでした。彼らとの出会いがあったからこそ、その後の自分に大きな勇気と力を与えてくれたのだと思います。言葉で表わさなければ伝わらないこと、本音を言い合えること……芝居づくりの中で何度となく話し合ってきたことは、そのまま自分の経験に生きてきたと今では確信しています。取り分け、人との関わりにおいて。一步踏み込んだ付き合いに臆病になっていた自分を、演劇部の仲間たちは少しだけ前向きにしてくれたから。そして、これからの人生においても、それらは自分を支えてくれるはずです。演劇部は、人生の大切な宝物であり、勇気であり、誇りだと胸を張って言えます。

同じ部活の仲間うちだけで人間関係をつくることに充足してはならないが、このEさんの言葉に従えば、「本音でぶつかり合うことができる人たち」との出会いこそが、現在の自分を支える力につながっている。「同じ部活の仲間うち」の人間関係かもしれないが、それ

¹⁰ 拙稿「高校演劇による地域文化交流の意義と課題—高橋揆一郎原作、札幌清田高校演劇部上演『観音力疾走』の歌志内公開リハーサル」（『北海道札幌清田高等学校研究紀要』2010 年 3 月）、あるいは前掲「演劇教育における教師の支援—札幌 K 高校『K 版 ロミオとジュリエット』上演を事例として—」を参照されたい。

こそが他者を信頼できるのだという連帯への自覚を育む訓練の場になっている。たかが 3 年間である。その 3 年間に同じ部活仲間という一番身近にいる存在と、連帯する関係を結ぶ努力や経験全くなしに、その後の社会における人間関係をつくる力を期待することが果たしてできるだろうか。彼女も記すように、「一步踏み込んだ付き合いに臆病になっていた自分を、演劇部の仲間たちは少しだけ前向きにしてくれた」のであり、その「少しだけ」の意味を見逃しては、教育本来の意義を見失うことになる。

4 北大生による質疑、考察

(1) 質疑

では、次に当日の講義のなかで、受講生から寄せられた質問や意見を紹介したい。

＊演劇部の活動の中で、例えば上演脚本を選ぶ話し合いのときに、「全員一致で決める」¹¹と言ったが、それはどのように指導するのか。

＊生徒がやりたいことと、顧問（教師）の主題がズレたときの、顧問の立ち位置はどのようなものか。生徒の自浄作用に任せるということか。

＊札幌市内のある進学校では、部活加入は 9 割加入ということだが、清田の加入率が約 6 割と低いのはなぜか。

＊部活の顧問は、土日勤務をしているが、制度的な支援の方法はなされているのか。

＊制作（上演企画を外部に知らせ、広める担当）の生徒はいるのか。役者とスタッフは別なのか。

＊自分の意見を発表できない生徒への教師の支援方法はどのようなものか。

(2) 考察

以上の質問・意見を受けたあとで、受講生に講義内容に対するアンケートを記述してもらった。質問内容は「高校生の演劇活動とその後の進路（人生）について考えるところを自由に述べてください。」というものである。受講生自身の経験もふまえながら書いてもらったところ、大変興味深い記述が多く寄せられた。上記の「3 演劇部卒業生の振り返り」から抽出した学びの諸相と対応させながら、以下に何点か抜粋して紹介したい。

① 「表現する力」に関して

❖(a) 自分の不勉強もあり、演劇の教育における効果を勘違いしていたように思う。演劇の中心を『演じる』ことに感じていたが、今回の講演を聴き『演じる』に至るまでが重要であることがよくわかった。部活動というコミュニティ内での社会的活動が、中・長期的な

¹¹ 清田高校演劇部では、活動の中で頻繁に話し合いを行う。特に上演台本の決定に関しては、約 2 週間前後を話し合いに費やす。部員全員に、自分がやりたいと思う作品を提出させ、どの作品を上演脚本として採用するかを決めるために話し合いを行う。決定に際し、基本的な手続きとなるものが「全員一致で決める」という原則である。

効果、例えばアウトプットする能力を養うというのは、演劇のもつ表現性によるものと感じた。他者に表現することを前提とした話し合いは、演劇独特で、自分が高校で所属していたサッカー部などは、“他者の目”が含まれない表現が前提だったと思う。自己を客観^{〔マ〕}できる点は効果的だと思えた。(理学院 M2)

❖(b) 高校で演劇部に入部する生徒はもともと表現したいという気持ちを持っていたり、今は表現が苦手でもそのような方向を備えた内面を持っているのではないかという印象がある。そのような人は、演劇以外であっても人生のいずれかの局面で有効に機会を利用して表現力を身につけていくのではないかと考えます。今日の講義を受けて演劇活動は、演劇部に属さない他の生徒にこそ重要なのではないかと感じました。(文学部 4 年)

❖(c) 演じることを通じて人に伝える技術を身につけることには良い面とそうでない点があるかもしれない。舞台に立つ経験によって役になりきり、大人数に発信する。一方で発言に慣れていない生徒が役を演じることに没頭してしまうと私生活でも仮面をかぶってしまいがちにならないだろうか？部の中ではだんだんと気心がしれて、うちとけていけてもクラス内で一対一の友人関係にすぐ発展できるとは限らない。(理学部 3 年)

② 「思考する力」に関して

❖(d) 「全員一致」を目指す話し合いがとても大きな意義を持つと感じました。どの演目をやるのかを決めるために、部にとっての演目の意義や客層を考えるなど、自己中心的な考え方だけではいけないことを生徒は学ぶことができる。様々な視点から考えて、総合的にいちばん良い選択肢はどれか、ということ、さらに様々な人の意見と合わせて考えることのできる場を経験することが大切だと思った。進路指導は生徒が自分の人生を自分の力で選びとってゆく力を身につけさせ、育てていくものであると私は考える。この「人生」は、進学についてだったり、職業だったり、または自分の信念とか、『生き方』というものであったりすると思う。決して、『受験指導』のみではないと思う。演劇部の活動は、生徒に「生き方」を考えさせるものだと思った。(文学部 3 年)

❖(e) 全体^{〔ママ〕}一致の原則について 最終的に“全体”を考えて意見を統一する、という方法は、多数決的に少数意見を浮き彫りにし、その人達を異端として同一化の方向へうながす、ということが行われるということだろうと思う。そうなれば“部の意思”という虚構の法：モラルに個人が敏感でいなければならないし、そうなると、閉塞的な共同体になってしまうのは必然であると思う。部が、外部と異なる行動規律を持つ、一つの社会として成立してしまうのだから。『個人の本音を言い合う』というのも、この規準の中にしかないのではないかと。最終的にマジョリティという所に回収されるなら（“個人の本音”が全体に承認されてもされなくても）演劇部の部員は高校でこういう閉じた共同体で生活し続けることになるのだらうと思いますが、でも、卒業後、会社、大学、他様々な共同体の一員になり、上手くやっていくにあたって、重要な経験になるのだらうとも思います。ただ、一人で、周囲の意思にとらわれず生きるタイプの人間を生むことはないのだらうと同時に

思います。(文・D2年)

❖(f) 演目の題材が偏ると、思考の柔軟性を失い、逆に視野を狭める可能性があるので注意する必要があるように思う。26歳女性Eさんの「本や漫画も限られたジャンルしか読んでいなかったから、同時に知らないことだらけの自分を思い知った」これの逆が起こりうる可能性もあると思います。)特に、真剣に取り組んだ活動は、悪い方向においても、その影響は大きいように思います。

③ 「主体的に活動する力」に関して

❖(g) [高校で野球部に所属していた] 当時は、「なんで指導者が何も教えないんだよ」と思っていたが、よく考えれば、自分なりに工夫して、考えながら練習を行っていたので、物事に対して主体的にかつ能動的に関わっていくクセがついたように思えます。大学院に進もうと考えたのも、周りに流されずに、主体的に自分が考えた結果だと思っています。(文学研究科 M1)

❖(h) 演劇活動をやることによって、「主体性」というのが創出されるのかなと思った。生徒や卒業生の話を見ると、「発言力」「表現力」といったものが、よく述べられていた。それらはただ何も考えずに発言する、表現するのではなく、考えたうえで「発言」「表現」していることが多い。このようなことは進路(人生)でも活かせると思われる。ある環境で自分の考えを伝えるためには、どのように「発言」し、「表現」すればいいのか、「発言力」「表現力」の柔軟性(適応力)がいきてくるのではないだろうか。(教育3年)

④ 「連帯する力」に関して

❖(i) 演劇自体は全く経験がないのですが興味深いです。何より演劇特有の役割分担が意義深いと思います。おそらく通常の部活(例えば運動系、文系でも美術や音楽)は、技やスキルをみがく一点に特化します。もちろん部活としての協調性などもありますが。しかし演劇の面白い点は、「裏方」を経験できることだと思います。(文学部3年)

❖(j) 高校での演劇活動は文化祭でクラスの出し物くらいしか経験がない。その時自分は照明係だったので、役者や監督などの人たちとどう劇を進めていくかの話し合いが楽しかった。経験が少ないので言えることはほとんどないが、話し合いなど、劇をどう創造していくかの過程が、生徒たちの育ちに大きく役立つことは非常に理解できる。(理学部3年)

むすび

当日回収したアンケートは53名分であった。現在の北大生による興味深い考察がまだまだあり紹介しきれないのが残念である。

受講生のこれらの感想から筆者自身あらためて認識したことは、第一に、演劇創造の過程によって生徒が学ぶものは、①、②、③、④…と分節化されるものではないということである。表現力や発言力、思考力といった力は、相互に影響し合う関係の中で高められ得

るものである。

第二に、引用した（b）さんや（c）さんが考察するように、筆者のいうような演劇教育によって獲得した「学び」が、演劇部の活動、組織内でしか適用されないものなのではないかという批判である。これは演劇部に限らず、どんな集団にも共通する課題である。集団活動が孕む危険性をふまえ、より開かれた集団づくりと活動を実践していく必要を感じる。

第三として、「全員一致」で決める話し合いの原則についてである。これには受講生から賛否両論が示された。上記に引用した受講生（d）さんのように「全員一致」の原則を、「自己中心的な考え方だけではいけないことを生徒は学ぶ」として評価する人が多かったが、中には（e）さんのように、「最終的に“全体”を考えて意見を統一する、という方法は、多数決的に少数意見を浮き彫りにし、その人達を異端として同一化の方向へうながす」ことであり、卒業後社会で「上手くやっていく」ためには必要かも知れないが「一人で、周囲の意思にとらわれず生きるタイプの人間を生むことはないだろう」とする。

確かに、「自己中心的な考え」を抑え、まわりと「上手くやっていく」力は、資本主義社会に適応した人材を育成するための「キャリア教育」に取り込まれてしまう危険性がないとはいえない。事実、受講生の中には、演劇経験によって「会社に入った後も、良い社員になることができると思う。」と記す人もいた。しかしそもそも「キャリア教育」には、「共同も連帯もない」¹²。「キャリア教育」のためではなく、「共同」と「連帯」に資するための演劇教育を目指し、上演までのプロセスにおいて、いかなる教育的意義が生まれるのかを検証していく必用があるだろう。

受講生の考察をもう一度彼ら彼女らにフィードバックし、北大生同士の討論授業を構成できたなら、さらに興味深い授業になったのではないかとと思われる。今後の課題としたい。

¹² 馬場前掲、27 頁。